

## じぶんできめる応援団 第6回

### 自分の生き方と向き合う場所に



永尾圭吾さん／神宮山皆満寺住職

金森大席さん／NPO 法人知多地域権利擁護支援センター事務局長

---

「じぶんできめる応援団」、第6回は武豊町で400年以上の歴史を持つ古刹・神宮山皆満寺の住職、永尾圭吾さんです。知多地域権利擁護支援センターが主催する講座『ろうスクール』でも講師を務めていただいています。成年後見とお寺、意外な組み合わせに見える両者の間には、どんな関係があるのでしょうか。

#### お坊さんはソーシャルワーカー！？

永尾：金森さんとは、お寺の門徒さんを通じて出会いました。

昔から、月命日のお参りに毎月うかがっていたお宅がありました。知的障害のあるお子さんと、ご両親でお住まいだったのですが、ご両親がだんだんと高齢になられて…。お父さんが亡くなられてからは、病気がちのお母さんとお子さんだけで暮らされていました。「お坊さんをお迎えするのも大変だから…」と言われ、お参りにうかがう回数も減って、何となく心配だなとは感じていました。

ある日、そのお子さんが一人で突然お寺を訪ねて来られました。どうされたのかとお話をうかがうと「お金を貸してほしい」と言われるのでびっくりしてしまっ

た。ご本人は「友達」と言っていたのですが、どうもあまり良くない人に騙されて、お金をせびられているようでした。本人は信じ切っているし、お母さんに相談するべきだろうか、かえって話をこじらせてしまわないだろうか…などと考えるとどうしていいか分からなくなり、途方に暮れました。

金森：ちょうどその頃、センターがそのお母さんの後見人を受任することになって、皆満寺さんにご挨拶に行ったのが最初でしたね。

永尾：「成年後見」という制度があることは何となく知っていました。でも、センターさんとお会いして「こんな支援があるんだ」と、初めて具体的に理解できたように思います。

金森：詳しくお話を聞くと、お子さんも障害のためか、地域で他にも色々なトラブルを経験していたことが分かりました。結果として、お子さんの後見もセンターで受任することとなりました。

永尾：サポートしてもらえる制度があって本当に良かったです。同時に、センターさんのことを知っていたらもっと早く相談できたのに、と悔やまれもしました。

金森：永尾さんがご家族のことをよくご存じだったので、支援につなげていただきやすかったのだと思います。

普段から地域の方のお宅を訪問して、いろいろなお話を聞いて…思えばお寺のお坊さんは、ソーシャルワーカーのような役割もされているんだなと感じました。

永尾：確かに、昔からお寺はそういう機能を果たしていたと思います。腹が立ったら僧侶に愚痴をこぼしたり、悲しいことがあったら一緒に静かに手を合わせたり…。困ったこと、不安なことがあったらすぐお寺に来て相談する。一人で頑張りすぎなくてもいい、頼れる場所がお寺なんだと、多くの人を感じていたと思います。

ただ、これは私たちお寺側の責任でもありますが、今はお寺と皆さんの距離が遠くなって、そう思っただいている方は少ないですね。その代わりとっては何ですが、公的なセーフティネットができて、金森さんたちのような方が地域の方の暮らしを直接的に支えてくれているのだと思っています。

金森：制度やサービスができたゆえに、お寺とか、地域の居場所とか、近隣の人同士で支えあう力が無くなってしまった、とも考えられるのではないのでしょうか。

役所の相談窓口に行くよりも、本当はお寺のようにふらっと立ち寄れるところで悩みや困りごとを話せるといいのにな、とよく思います。

## 自分の生き方と向き合う場所

永尾：センターさんが主催している『知多半島ろうスクール』という講座の一環として、受講生の皆さんにお寺を訪ねていただいたことは、うれしかったですね。

—『ろうスクール』は老後の生活に役立つ法律や、お金に関わる知識を学ぶ講座ですよ。なぜお寺へ…？

金森：私たち成年後見人は、「判断能力がない状態」の方としかお会いできないことがほとんどです。

先ほどの親子の方ですが、その後お母さんも亡くなりました。お葬式も皆満寺さんにお願ひして、私たちも参列させていただきました。焼香をしながらふと「本当に彼女は幸せに最期を迎えられたのだろうか」という思いがよぎりました。私たちと出会う以前はどんな生き方をしてきたのか、誰と関わっていったのか…そうしたことが、私たちではなかなか確かめられなくて、分からないんですね。

一方で、ろうスクールに参加される人はもちろん判断能力もあって、心身ともに健康な方です。今は老後の生活を支える制度も整えられていますし、便利な商品やサービスもたくさんあります。でも、情報がありすぎて、逆に自分は何を選ぶべきか、どうしたらいいかと迷う方が多いのです。元気なうちに、自分の生き方について考えたり、話したりできる場が必要ではないかと考えた時、「そういえば、お寺はそんな場所なのでは」と思ったのです。



永尾：おっしゃる通りですね。お寺というと、亡くなったご先祖の供養をするところ、というイメージを持たれる方が多いのですが、本来は「今、生きている自分」を見つめ直す場なんです。

「限りある生」を生きていることに気づいて、ちょっと襟を正されたり、逆に頑なだった思いのカドがとれて、心にゆとりが生まれたり。そんな場所でありたいと思っています。

金森：ろうスクールの受講生の方も、皆満寺を訪れた後に「どう生きるか考えるようになった」「死生観が変わった」とおっしゃることが多いんですよ。

## **お互いに支えあえる地域をつくる**

永尾：身近にセンターさんのように頼れる人たちが居てくれることは、大変心強いです。

でも、成年後見制度は「最後の砦」でもあります。成年後見について多くの人に知ってもらうのと同時に、成年後見人が必要になる前に、自分の生き方を知ってもらい、最期を託せる人を周りに増やしていくことも大切ですよ。

私は、お寺はそんなつながりを作る場でもありたいと考えています。お寺でライブやヨガを楽しむ「てらテラス」や、キャンドルナイトといったイベントを開催しているのもそのためです。気軽にお寺に来てもらい、好きなことや楽しいことを通じて人とつながったり、リラックスして自分と向き合う時間を過ごしていただきたいと思っています。

金森：結婚しなかったり、子どもを持たないまま高齢になる方が増えています。判断能力はあっても身寄りがなく保証人を頼める人がいないとか、孤立して寂しいとか、悩みを抱えている人はたくさんいらっしゃるんですよ。

センターではこれから、こうした「判断能力はあっても、困っている人」の支援ができる仕組みを地域に作っていく活動にもますます力を入れたいと考えています。

永尾：既存の制度の中では解決できない問題であっても、みんなで知恵を出し合って支えあえる地域でありたいですよ。

お寺も誰もがその人らしく生きていける地域づくりの一助になっていきたいと思います。